

生命

タケちゃんの飛行機

戦後間もない頃、少年たちは、ゴム動力のプロペラ飛行機に熱中したものであった。敗戦という世の中の変わりようは、子ども心にも意識はされたものの、「零戦」や「隼」という響きには捨てがたい思いがまだ残っていたのである。私も子どもの頃から鳥のように大空を自由に飛んでみたいという憧れを持っていた。

当時、私の家の近くにその模型飛行機作りの名人がいて、毎日のように高台から小さな模型機を飛ばすのであった。我々はその人に親しみを込め、年上の人を「タケちゃん」と呼んでいた。「タケちゃん」の年齢は今にして思えば二十四、五歳位で、口数の少ない人でいつ会ってもにこやかで穏やかな人であった。この人に教職を勧める人もいたようであったが、「自分には教える資格はない」と断つたと漏れ聞いたことを記憶している。この人があるとき、私に模型飛行機の作り方を教えてくれたのである。

模型飛行機作りは単純なものだと思っていた私は、一つひとつの説明に、目から鱗うろこの落ちる思いであった。驚いたのは、タケちゃんの創る飛行機には設計図が無かったことである。しかも、スケール

は私たちの作る飛行機の二分の一の大きさであった。プロペラの均衡のとる磨き方、主翼の仰角度ぎょうかくど、バルサ材の胴体の長さ太さ、リブ（主翼に浮力をつけるための支え）の作り方など、さらに、動力をプロペラに伝える細い芯棒しんぼうを、細いヒューム管によって抵抗を少なくしているのであった。

タケちゃんの作った飛行機は最上空に達したと思われる時、必ず動力源のゴムが落下するのである。しかし、飛行機は急には降下することはしない。むしろ身軽になって、旋回しながら上昇気流を捉え、長い時間ときを魔法使いのように飛び続けて、暫くして足元近くに着地するのであった。タケちゃんはその飛行機を毎日のように改良していった。

タケちゃんはいつも口癖のように云っていたことがある。「あのアンテナを自分の飛行機で超えさせてみたい。理論的には可能なはずなんだ」そう云っていつもの白い登山帽の顔が笑っていた。NHKと局名の変った高台にあった麓山の放送局のアンテナは、六十メートルを超えるもので、郡山のどの位置からも見えるものだったのである。

タケちゃんは或る冬の朝、自ら命を絶った。歳を経て考えられる

ことは、この人は優秀さを評価され、戦時中は飛行機の設計部門を担当し、その時、もはや刷り直しの効かない人生の設計図を書き上げてしまっていたのではないかということである。近所の人からは同情こそあれ、陰口を聞かされたことはなかった。それはこの人の温和さとこの家族の静かさが、形而下の噂を話の種に出来ないほどに昇華していたのだと思う。

私の兄は昭和十九年春、十七歳で予科練に志願した。両親は長男の戦死公報を手にしたばかりだったので反対したが、「兄の敵を討つ」と云って次兄はふるさとを離れたのであった。終戦の春といえど霞ヶ浦には練習機もなく、訓練もそこそこに九州の鹿屋基地で震洋の自爆攻撃の訓練中に終戦を迎えた。家に辿り着いたとき兵であった証は汚れた軍帽唯一つであった。私を小さい時から可愛がってくれた兄であったが、帰郷してからは別人のように変わっていた。それが先に戦死した友への贖罪から発したものか、敗戦の悔しさからだっのかは私にはいま以って分からない。ただ、戦争とは良識という理性の判断を狂わせ、人間の尊厳とも言える魂までも抉り取ってしまう悪魔に思えた。このとき、すでに次兄は生きた屍となっていたのである。

戦争には、生き残った人々にも悲劇はあったのである。食糧難を逃れるためばかりではない。精神を売り渡すという価値の変化をどのように埋めるかは空腹よりも辛かったに違いない。

3・11の原発事故と大津波の爪痕は未だに消えることはない。経験が生きるとは限らないが、かつて、我々の頭上には無差別に焼夷弾が投下され、広島、長崎には原子爆弾が投下された。正確な犠牲者の人数は未だに明らかにされていないが、戦争の犠牲者は二百万人以上が亡くなったと云われている。(外国人を含めるとさらに多くなる) 一人一人の命はかけがえの無いものであるが、大東亜戦争の犠牲者は今回の震災の人数に比べれば約二百倍に上る。人間の生涯には安穩は無いという人もいる。「寿永^{いのち}ければ予想外のことに遭遇する」原発事故も堤防の高さも次世代への警告と捉え、叡智を純化していくしかない。

タケちゃんは、あの小さな模型飛行機を操縦して、放送塔の遥か上空を天国に向かって飛んで行ったに違いない。

それにしてもタケちゃんは、天界から現代の日本の国をどのように見ているか気になるところである。